

お茶大での交換留学

大連外国語大学
ヨウ シンイ
K2590014

あと何日で、私は帰国のフライトに搭乗し、窓際から思い出の詰まったこの町を見下ろしながら、小声で「さよなら」とつぶやくのだろう。東京で過ごしたこの一年間は、気づけば数えきれないほどの出会いと経験に満ちており、その一つ一つが、私にとって大切な宝物となった。

ここでの留学生活は、何年後に思い出しても、きっと心が温かくなる時間になるだろう。春には上野公園で桜を眺め、夏には友人と横浜、川越、所沢など東京近郊の街を巡り、人生で初めて花火大会にも足を運んだ。秋には京都で紅葉を楽しみ、冬には沖縄でクジラウォッチングを体験した。これらの旅の記憶は、これからも私の心の中で静かに輝き続けると思う。

お茶の水女子大学の図書館には豊かな蔵書があり、私はその学術資源に支えられながら、ここで無事に卒業論文を書き終えることができた。論文執筆にあたっては、指導教員の松岡先生から多くのご助言をいただき、この場を借りて心より感謝の意を表したい。

また、昨年の年末にインフルエンザにかかり、高熱に苦しんでいた際、親身になってクリニックの予約を取り、励ましてくださったのは、寮の管理人さんだった。異国の地で初めて、「家」に近い温かさを感じた出来事でもあった。音羽館の管理人の皆さまにも、改めてお礼を申し上げたい。

この一年を通して、私自身も少しずつ変化してきたように思う。西川先生の授業では、お茶大附属小学校の子供たちと交流し、日本の教育現場の一端を体験することができた。また、市原先生や加藤先生の授業では、人前で発表する機会を重ねる中で、自分に対する自信も自然と芽生えていった。

東京での日々は、まるで一つの長い夢のようであり、同時に、忘れがたい旅でもあった。この生活は終点であると同時に、新たな人生の起点でもある。これからもお茶大で学んだことを胸に刻み、前に進んでいきたい。

最後に、自作の一句をもって、お茶の水女子大学での留学生活にささやかな

区切りをつけたい。

「お茶大で 春夏秋冬 歩みけり」

